＜随　　想＞

論語よみの論語しらず

向　後　鉄太郎

この4月，公害研より室蘭保健所長に変わった。保健所は，“昔とった杵柄（きねずか）”でもあり，仕事そのものは20年近くのブランクはあるものの，まずまずのすべり出しと思っている。しかし人口15万ばかりの小さなまちではあるが，本州でいうと県庁所在地ともいえる行政の中心市でもあるためか，いまだに新聞記者諸君のインタービューとやらに応じなければならず，これが意外と厄介なものである。だいたい聞かれることが，同じようなことばかりであるのも気に入らない。そして最後には，必らず

「趣味は？」

とくる。実をいうと私はこの“趣味”ということばが大嫌いである。一般に（趣味とは，専門家としてではなく，楽しみとしてすること）といったように使われるわけであるが，近頃の流行（はやり）のことばではないが，

「カラスの勝手でしょう」

といいたくなってくる。しかし相手がブンヤさんでは，泣く子もだまらなければならない。そこでムラムラといたずら心がおこる。

「バクチです」

と答える。すると相手は必らず，

「えっ！バクチ？あのバクチですか」

「ええ，日曜ごとにやっています。ケイバというバクチです」

「ああ，ケイバ，競馬をやるんですか？」

ここでケイバとは，保健所長にあるまじき趣味ではないかという目をする人が多い。しかしそれにはかまわず，おもむろに一冊の本をとりだす。

「これは『論語』という本です。ごしょうちの中国の古典で，日本人にも多くの影響を与えました。この中に孔子のこういうことばがあります。（陽貨第十七・二十二）ここです。

子日，飽食終日，無所用心，難矣哉，
不有博奕者乎，為之猶賢乎已

これはこう読みます。

（子ののたまわく。飽くまで食らいて日を終え，心を用いる所なし，難（かた）いかな，博奕（はくえき）なる者あらずや，これをなすは猶（な）おやむに賢（まさ）れり）

金谷治先生の訳によりますと，

「先生がいわれた，『一日中 腹一ぱい 食べるだけで，何事にも心を働かせない。困ったことだね。バクチ（さいころ遊び）というのがあるだろう。あんな遊びでも，それをするのは何もしないよりましだよ』これすなわち，孔子サマは，休みにゴロネしてテレビでも見るより能のない近頃のわれわれに対してもこういわれているわけだ。そこで私は発奮し，日曜日はケイバということなんですよ」

こう有名な文献を目の前につき出されると，「なるほど」といわざるを得ないのかもしれない。しかし若いブンヤさんにも，いぜんとして遊びはケシカランという考えが多いことを私は発見し，一面快哉も叫んでいるわけである。いじわるジイさんになったものである。こういうのを『新論語読みの論語しらず』というのかもしれない。

（前北海道公害防止研究所長）